

技術部業務実施委員会報告

技術部業務実施委員会

委員長 奥林 豊保

業務実施委員会は今年度より1名の委員を加えた16名の技術職員により構成され、ほぼ毎月、年10回開催されました。会議は技術部の活動の中心となる各WGの活動の計画や報告および当局に対する要望などが主な議題として取り上げられています。技術部独自の活動として、学外では小学校に出向いて行う「おもしろ科学実験教室」、県立社会教育総合センター主催の「まなびの広場サイエンスフェスタ」、大分工業連合会主催の「ものづくり展ワークショップ」、また学内においては教職員・学生対象の「パソコン組立教室」、さらに「大学開放イベント」、「こどもイベント」への参加と様々な活動を行ってきました。これらの活動の詳細については各WG活動報告に委ねたいと思います。

本年度においても技術職員に関する事案で前進したものもありました。一つは大学法人化以来の案件であった教室系技術職員の技術専門員および技術専門職員の選考基準や標準職務表への格付けがなされたことです。この格付けについては多くの歳月を要しましたが、事務局および技術職員の努力により実を結ぶ事ができました。これも技術部の組織化や活動が反映された結果であると考えています。今後はこの規程がどの様に運用されるのか注視してまいりたいと思います。

その他にも、これまで技術職員の図書の貸出しについては、5冊以内2週間とされ、事実上本人名義での借り入れは不可能な状態が長らく続いていました。この件に関し、技術職員より図書の貸出し条件の緩和について意見が出されました。これに対し当技術部では部長名で貸出期間、および貸出し冊数を教員と同様とする旨の要望書を提出、これらの案件は学術情報拠点運営会議で審議され承認されました。このような事例の積み重ねを技術職員の意識の向上に繋げることが必要であることは言うまでもありません。

組織は周りの環境に適応し、必要に応じて変化しなければ維持することはできません。これは当技術部についても同じことが言えます。実体の伴わない組織、活動の見えない組織ではいつまでも存続できる保証はありません。機能する組織として再組織化され3年が経過し、多くの職員の協力により概ね順調に推移して来ましたが、技術職員の中にも組織そのものや活動に関する温度差が一部感じられることは否めません。技術部独自の活動は個々の技術職員が通常業務の合間を縫って行っていますが、一部の職員にその多くの負担が掛っていることも事実です。これらの活動を末永く持続させるには、負担の公平性についても今後の検討課題の一つです。

現在、40人の技術職員を擁する組織の中で50歳以上の職員が約半数を占めています。あと数年後には多くの職員が職場を去ることになります。この先人員の削減についても俎上に上ることは避けて通れない問題です。この様な状況を考慮すると、将来を見据えた組織の在り方も今後議論の対象となるでしょう。この様に技術部を多くの問題が取り囲んでおり、幾多の困難が予想されますが、その一つひとつをクリアしながら組織としての存在意義を見出していかなければならないと考えています。